

## 「住宅をどのように造り、どのように住むのか」

丹呉明恭

### 1. 住宅の解体は時間を考えること

私たちは時間を、過去・現在・未来と区切って考えますが、時間は止まることなく続いているので、三つに区切って考えるのは私たちの習慣上のことといえます。時間認識をもう少し厳密に考えると、過去も未来も思考するのは、常に、今この時なので、過去を考えることができるのは、実は過去がギュット圧縮された状態で現在に含まれていると考える以外にありません。そのような状態を「縮約」と表現しますが、未来も同じような状態で、今思考されていると考えると、常に存在するのは現在だけなのです。フランスの哲学者ジル・ドゥルーズは次のように言っています。『時間の総合は、時間の中で現在を構成する。だからといって、現在が時間のひとつの次元であるというわけではない。存在するのはひとり現在のみである。時間の総合は、時間を生ける現在として、過去と未来をその現在の二つの次元として構成するのである。』（「差異と反復」）

私は木造住宅を造りながらゴミのことを考えてきましたが、ゴミについて考えることは、実は時間について考えることではないかと最近は思っています。ゴミのことを考えたのは、私が造りたいと思っている木造住宅の技術が、どのような意味を持つのかを知りたいと思っていたからです。国産の木を自然に乾燥させた材木を使って木の栓で接合して骨組みを造り、土や木で壁や天井を造る、そのような木造住宅を造る技術は、今ではほとんど使われていません。90%以上の住宅が全く正反対の技術で造られています。木を人工的に加工して半工業製品のようにして工場のラインで加工します（プレカット）。それを金物で接合して骨組みを造り、その骨組みに工場で造られた材料を接着剤や金物で取り付ける方法です。このような環境の中で、私が造りたいと考える木造住宅とそれを造り続けることの二つの意味を知りたかったのです。もし大した意味がなければ、ここ二十年続けてきた木造の技術について考えることも、構造的な解析をすることも、あまり意味がないことになります。なにより一般的に造られている木造住宅よりも高いコストを、住む人に要求する必然性はありません。私はその意味を『ゴミ＝時間』という図式の中に見つけたのです。

### 2. こわし屋と古木屋

住宅は古くなると解体されますが、戦前までは「解体業」という言葉は無く、家屋の取り壊しをする者を「こわし屋」、こわした古材を販売する者を「古木屋

(ふるきや)」と呼んでいたそうです。『木造家屋の取り壊しは、原則として建築工程の正反対の順序で行っていた。木材の部材はホゾなどを傷めないように解いた後、釘はすべて抜いて種類ごとに荒縄で結束し、瓦は割れないように屋根から降ろして集積、あるいは4枚ずつ荒縄で結束する。また、金物類は抜いた釘を含めてすべて集めて回収した。』(全国解体業団体連合会「木造(軸組)住宅解体組成分析調査報告」)。「古木屋」はこのようにして出てきた古材を、新材と同じように林場(りんば)に立てかけて販売していたということで、このような形は1970年頃まで続いていたということです。1970年頃にこのような仕組みがなくなって、ただ壊して適当に処分する業者が現れて、機械ですべて一緒くたに解体する「ミンチ解体」が全盛になり、住宅は解体されてゴミになってしまったということです。

「こわし屋」と「古木屋」の話には私の知りたいと思っていたことの一つがありました。それは、住宅を造る技術とは、本来ゴミにしない技術だったということです。同じ報告書では、古木屋のもう一つの仕事である移築解体について、次のように書かれていました。『移築解体こそが解体職人の腕の見せ所であり、多くの職人が腕を競っていた。また、建物の解体は廃棄ではなく移築、少なくとも再利用(リユース)を意味し、重要な建物ばかりでなくごく普通に移築解体が盛んに行われていた。(中略)しかし、昭和50年(1975年)ごろからは材質の低下、接着剤の使用、職人不足、費用等々の問題から移築解体はほとんど影を潜めた。』

私はここで大きなことに気がつきました。造る技術とこわす(こわすとは再利用が前提の言葉です)技術が同時に存在していなければ、すべてはゴミになってしまうのだということ。住宅が何十年か使われて「こわされる」ということは、造るときにこわされることが前提であったわけですから、こわせるように造られていたということです。それは、造る技術のなかにこわす技術が同時に存在していたということに他なりません。私は人間の技術の原点は、ここにあるのだらうと思いました。今造る時に、未来にこわすことがギョット圧縮されて入っていなければならないということ、そしてこの圧縮する技術とは、私たちが過去に持っていた技術だということ、それらが現在の技術を構成しているということ。

話はこうなります。過去に持っていた「こわす技術」と「造る技術」が現在の技術の中に圧縮されて入っていて、未来にその技術を伝えることができれば、その技術で造られたものは解体されてゴミにならない可能性を持つ。可能性といたのは、ゴミにしないためには、社会的な仕組みが必要で、未来にそれが存在しているかどうかは分からないからです。

### 3. なぜ、住宅をゴミにしてはいけないのか

ところで、ゴミとは一体何なのでしょう。台所から出るゴミは、ゴミとして処分されているからゴミですが、土に埋めておけば自然に土になってしまうので、実はゴミではありません。いずれ地球に同化するものをゴミとは言いません。ゴミとは、地球に同化できずに永久に残る物を言います。私が造りたい住宅は木や土で造るので、処理の仕方によってはゴミになりません。しかし、工業製品で造られた住宅は、同化できない材料でできているのでゴミになってしまいます。

住宅は、いずれ（未来に）解体されます。そのときにゴミにしてはいけないのです。何故未来において住宅をゴミにしてはいけないのでしょうか。その明確な意味を私は柄谷行人の本から知ることができました。

『二十世紀後半において明瞭になってきたのは、産業資本主義の発展が、自然的に見て決定的な限界に直面していることです。具体的に言えば、グローバルな環境破壊、エネルギー・食糧不足などが差し迫っています。われわれが現在の生活水準を維持するかぎり、この危機を全面的に招来することは不可避的です。その悲惨な事態を体験するのは、未来の他者です。しかし、それがわかっているにもかかわらず、このような環境破壊をもたらす産業資本主義的発展を止めることは、幸福主義（人が幸福であることは善である＝資本主義の原点）の原理からは出てこない』（「原理」）

この未来の他者について、私たちは次のような義務を負っていると柄谷行人は言います。

『（私たちが）自由であるためには、未来の人間、今ここに存在しない人間を自由たらしめることが同時に要求されるのです。たとえ生きている者の間に公共的な合意が成立したとしても、それが倫理的に正しいとは決まっていないのはなぜか。われわれの「幸福」が、未来の他者をたんに手段として扱い、目的（自由な主体）として扱わないことによって獲得されるものだとしたら、それは倫理的でないからです』

今私たちが造る住宅が未来にゴミになるのであれば、未来の人に不自由を押し付けることになり、未来の他者を私たちの生活の手段として扱うことになるというのが、その理由です。住宅を造る現在は、捨てるという未来とともに構成されているのです。

私が造りたいと考えている木造住宅の意味は、ここにしか見出せないだろうと強く思います。

ゴミを考えてきて、少々コストがかかっても、最初に書いた造り方を続けるべきだと思っています。しかし将来にゴミにならないような可能性が本当にある

のか、と良く問われます。分かるけど、理想論だよねという反論です。しかし造るという行為は、そのようなことだとしか思えないのです。人間はそうにしか造ってはいけないのだと、私は思っています。わたしは、大工塾という大工さんとの勉強会を15年ほど続けてきましたが、そこに参加してもらった大工さんのほとんどが、同じように考えています。自分の現場では、合板も石膏ボードも一枚も使わないとがんばっている大工さんもいます。先の反論は、そのような大工の努力に如何ほどの意味があるのだろうか、という疑問に通じますが、住まいを造りたいという動機は、木や土で住まい造ってきた人間の過去が詰まっている現在に発するものです。その方向性は未来の人に不自由を押し付けない、ゴミを出さない、ということにしか有り得ないと、私は考えています。